追浜中学校三学年　前期期末試験　二〇二一年九月三日（金）

国語

○解答用紙に組・出席番号・氏名を必ず書くこと。

○字は楷書で丁寧に書くこと。読めないものは採点できません。記号も同様です。

○数字で答える問題は、全て算用数字で答えること。（○ 7　× 七）
ただし、作文問題は漢数字を使います。

○漢字指定の問題は漢字が間違っていれば不正解です。
ひらがな可の問題は漢字に自信がなければひらがなで書いてください。

○抜き出し問題は、漢字が間違っていても抜き出し箇所が正しければ正答とします。
ただし、明らかに異なる漢字を書いている場合や、漢字間違いによって意味が変わってしまう場合は誤答とします。

○字数指定のある抜き出し問題は、かぎかっこや句読点（、　。）を一字に含みます。
（例）最後の六字を抜き出しなさい。
握手をした　→　×　　手をした。」　→　○

（例）文中から十二字で探して書きなさい。
君が、「ヤスヒロ」だね。　→　これで十二字とします

○作文問題は減点対象に注意しながら取り組んでください。

三年　組　番（　　）

○単元別漢字P28～37
○青（赤）プリント3・4
○語句の意味
○教科書「課題作文」「文法まとめ P212～219」
○応用問題

一、 次の傍線部の漢字は読みを答え、ひらがなは漢字で答えなさい。楷書で丁寧に書くこと。[知識・各1点]

①僅差で勝利する。　②褐色に染まる。　③酵素のはたらき。　④山麓に広がる森。
⑤詮索はしない。　⑥災厄が訪れる。　⑦象牙でできている。　⑧閑静な住宅地。
⑨硝酸ナトリウム。　⑩罷免される。　⑪けしょうをする。　⑫夏をまんきつした。
⑬友をすげだちする。　⑭あさせに乗り上げる。　⑮やよい時代。　⑯ざいばつ解体。
⑰しんちょうに考える。　⑱失敗をきぐする。　⑲権利をじょうとする。　⑳せんざい一遇の機会。

二、 語句の意味に関する各問いに答えなさい。[知識・各1点]

(1) 各文の傍線部の意味をそれぞれア～コから選び、記号で答えなさい。

①賞金が出ると聞き、俄然張り切りだした。　②良いものと悪いものを峻別する。
③白黒をつける。　④あまんじて受け入れる。

ア ありがたく　イ 我慢する　ウ 積極的に　エ どちらなのかはっきりさせる
オ 二つのうち一つを選ぼうと、優劣や損得を比べる　カ 厳しく区別をつける
キ 組み合わせる　ク 誰よりも力を発揮すること　ケ 今までの自分を超えるほどに
コ 穏やかだったものが、急に勢いよくなること

(2) 次の各文を表す四字熟語として適切なものをそれぞれア～コから選び、記号で答えなさい。

①一生に一度限りの出会い。　②最初から最後まで筋が通っていること。
③もってのほかであること。　④短い時間。

ア 起承転結　イ 一朝一夕　ウ 一石二鳥　エ 一期一会　オ 首尾一貫
カ 不言実行　キ 完全無欠　ク 言語道断　ケ 日進月歩　コ 千差万別

(3) 次のような様子を言い表している故事成語をそれぞれア～コから選び、記号で答えなさい。

①彼は勉強が苦手だったが、一生懸命努力をして、先生になるという夢を叶えた。
②自分は登山に行きたいと主張していたが、周りには海水浴に行きたいという人しかいなかった。
③大事なデータを誤って消してしまい、復元しようとしたができなかった。
④完成した作文を読み返し、さらに良い表現になるように書き直した。

ア 背水の陣　イ 四面楚歌　ウ 水魚の交わり　エ 蛍雪の功　オ 蛇足
カ 推敲　キ 杞憂　ク 朝三暮四　ケ 矛盾　コ 覆水盆に返らず

(4) (　　)の意味の慣用句になるように、【　　】に入る適切な動詞を終止形で答えなさい。
ひらがな可。

①お茶を【　　】(適当にその場をごまかす)
②舌を【　　】(感心する)
③猫を【　　】(本性を隠しておとなしくする)

三、文法に関する各問いに答えなさい。[知識・各1点]　(9)のみ[思・判・表]

(1) 次の各文について、①②は文節の数を、③④は単語の数を算用数字で答えなさい。

①足が痛かったが、最後まで走った。(文節)　②もう一度よく考えてみましょう。(文節)

③窓の鍵をしっかり閉めた。(単語)　④親しい友達と楽しく話をする。(単語)

(2) 次の各文について、問いに答えなさい。

①二つの傍線部が主語と述語の関係になっているものをア～オから全て選び、記号で答えなさい。

一つの解答欄に全て書くこと。

ア 夜空に 無数の 星が 輝く。

イ 寒いので 父は ストーブを つけた。

ウ 赤い 車が すごい スピードで 走り抜けた。

エ ああ、きれいだなあ、富士山は。

オ 先生が 話して いるので、しばらく 黙った。

②右のア～オのうち、主語にあたる文節の省略がされているものを一つ選び、記号で答えなさい。

(3) 次の各文から(　)の品詞を抜き出して答えなさい。

①ゆっくり温泉に入れば、あらゆる疲れがとれてしまう。(副詞)

②大きなカブトムシはとてもかっこいい。(連体詞)

③大きいケーキをたくさん食べたい。(形容詞)

④昼食はラーメンまたはうどんにしましょう。(接続詞)

⑤おはよう、今日もきれいだね。(感動詞)

(4) 名詞にあたる単語を二つ答えなさい。誰にでも分かるものにすること。

ただし、数詞・代名詞・形式名詞は除く。(各1点)

(5) 次の各文の傍線部の活用の種類を答えなさい。略さずに書くこと。ひらがな可。

①罪を重ねる。　②外で運動したい。　③消しゴムを借りた。

④鏡がある教室。　⑤あなたも来ますか。

(6) 次の各文の傍線部は用言です。動詞なら「ア」、形容詞なら「イ」、形容動詞なら「ウ」と、それぞれ記号で答えなさい。また、それぞれの活用形を答えなさい。ひらがな可。(記号・活用形ともに正答で1点)

①俺はまだ死なない。　②止めればよかった。　③私にケーキを買え。

④彼女はとても面白い。　⑤なんてきれいな声だ。　⑥一緒にいると楽しくなる。

(7) 次の各文から、傍線部が格助詞でないものを全て選び、記号で答えなさい。

一つの解答欄に全て書くこと。

ア 部活動を引退する。　イ トムとジェリー。　ウ ゴリラより強い。　エ 旅行に行きたい。

オ 小田原へ向かう。　カ 柔道大会で優勝する。　キ 剣道も好きだ。　ク 風や雨に負けない。

(8) 次の各文の傍線部は助動詞です。それぞれの意味をア～ソから選び、記号で答えなさい。

①明日こそは勉強しよう。　②青く澄み切った空。　③それ、生でも食べられるよ。
④顔色が悪く、かなり苦しそうだ。　⑤昨日は寒かった。　⑥弟に掃除させる。
⑦彼とは話さない。　⑧彼女はまるで天使のようだ。　⑨先生が失敗することはあるまい。
⑩明日は創立記念日です。

ア 打ち消し　イ 打ち消しの推量　ウ 打消しの意志　エ 過去　オ 完了　カ 丁寧
キ 様態　ク 存続　ケ たとえ　コ 断定　サ 受け身　シ 使役　ス 希望　セ 意志
ソ 可能

(9) 次の各文を、傍線部に気を付けて視点を置き換えて書き直しなさい。一文で答えること。（書く・各1点）

①ぼくが彼女に手紙をもらった。
・「ぼくがされた」ことから、「彼女がした」ことに視点をおいて。

②図書館内では話をしないでください。
・話をしないことを「お願いする」形から、話をすることを「許可しない」形に。

四、次の文章を読み、各問いに答えなさい。［思・判・表　読む］

江戸時代、京都の高瀬川を大阪へ向かう高瀬舟という舟があった。舟に乗せるのは遠島（刑罰の一つ。島流し。）を申し渡された罪人で、その身の上話を聞くつらさから、同心たちの間では不快な職務として嫌われていた。同心羽田庄兵衛は、喜助という弟を殺した罪人を高瀬舟に乗せることになる。

いつの頃であったか。たぶん江戸で白河楽翁侯が政柄を執っていた寛政の頃ででもあっただろう。知恩院の桜が入相の鐘に散る春の夕べに、これまで類のない、珍しい罪人が高瀬舟に乗せられた。

それは名を喜助といって、三十歳ばかりになる、住所不定の男である。もとより牢屋敷に呼び出されるような親類はないので、舟にもただ一人で乗った。

護送を命ぜられて、一緒に舟に乗り込んだ同心羽田庄兵衛は、ただ喜助が弟殺しの罪人だということだけを聞いていた。さて牢屋敷から桟橋まで連れてくる間、この痩肉の、色の青白い喜助の様子を見るに、いかにも神妙に、いかにもおとなしく、自分をば公儀の役人として敬って、なにごとにつけても逆らわぬようにしている。しかもそれが、罪人の間に往々見受けるような、温順を装って権勢にこびる態度ではない。

庄兵衛は不思議に思った。そして舟に乗ってからも、単に役目の表で見張っているばかりでなく、①絶えず喜助の挙動に細かい注意をしていた。

その日は暮れ方から風がやんで、空一面を覆った薄い雲が月の輪郭をかすませ、ようよう近寄ってくる夏の暖かさが、両岸の土からも、川床の土からも、もやになって立ち上るかと思われる夜であった。下京の町を離れて、加茂川を横切った頃からは、辺りがひっそりとして、ただへさきに割かれる水のささやきを聞くのみである。

夜舟で寝ることは、罪人にも許されているのに、喜助は横になろうともせず、雲の濃淡に従って、光の増したり減じたりする月を仰いで、黙っている。その額は晴れやかで、目にはかすかな輝きがある。

庄兵衛はまともには見ていぬが、始終、喜助の顔から目を離さずにいる。そして不思議だ、不思議だと、心の内で繰り返している。それは喜助の顔が縦から見ても、横から見ても、②いかにも楽しそうで、もし役人に対する気がねがなかったなら、口笛を吹き始めるとか、鼻歌を歌いだすとかしそうに思われたからである。

庄兵衛は心の内に思った。これまでこの高瀬舟の宰領をしたことはいくたびだかしれない。しかし乗せてゆく罪人は、いつもほとんど同じように、目も当てられぬ気の毒な様子をしていた。それにこの男はどうしたのだろう。遊山船にでも乗ったような顔をしている。罪は弟を殺したのだそうだが、よしやその弟が悪いやつで、それをどんな行きがかりになって殺したにせよ、人の情としていい心持ちはせぬはずである。この色の青い痩男が、その人の情というものが全く欠けているほどの、世にもまれな悪人であろうか。どうもそうは思われない。ひょっと気でもくるっているのではあるまいか。いやいや。それにしては、なにひとつ③つじつまの合わぬ言葉や挙動がない。この男はどうしたのだろう。庄兵衛がためには、喜助の態度が考えれば考えるほどわからなくなるのである。

しばらくして、庄兵衛はこらえきれなくなって呼びかけた。「喜助。おまえ何を思っているのか。」「はい。」と言って辺りを見回した喜助は、なにごとをかお役人に見とがめられたのではないかと気づかうらしく、居ずまいを直して庄兵衛の気色をうかがった。

庄兵衛は、自分が突然問いを発した動機を明かして、役目を離れた応対を求める言いわけをしなくてはならぬように感じた。そこでこう言った。「いや。べつにわけがあってきいたのではない。実はな、俺はさっきからおまえの島へ行く心持ちがきいてみたかったのだ。俺はこれまでこの舟でおおぜいの人を島へ送った。それはずいぶんいろいろな身の上の人だったが、どれもどれも島へ行くのを悲しがって、見送りに来て、一緒に舟に乗る親類の者と、夜通し泣くに決まっていた。それにおまえの様子を見れば、どうも島へ行くのを苦にしてはいないようだ。いったいおまえはどう思っているのだい。」

喜助はにっこり笑った。「御親切におっしゃってくだすって、ありがとうございます。なるほど島へ行くということは、他の人には悲しいことでございましょう。その心持ちは私にも思いやってみることができます。しかしそれは世間で楽をしていた人だからでございます。④京都はけっこうな土地ではございますが、そのけっこうな土地で、これまで私のいたしてまいったような苦しみは、どこへ参ってもなかろうと存じます。お上のお慈悲で、命を助けて島へやってくださいます。島は、よしやつらい所でも、鬼のすむ所ではございますまい。私はこれまで、どこといって自分のいていい所というものがございませんでした。今度お上で島にいろとおっしゃってくださいます。そのいろとおっしゃる所に、落ち着いていることができますのが、まずなによりもありがたいことでございます。それに私は、こんなにかよわい体ではございますが、ついぞ病気をいたしたことはございませんから、島へ行ってから、どんなつらい仕事をしたって、体を痛めるようなことはあるまいと存じます。それから今度、島へおやりくださるにつきまして、二百文の鳥目をいただきました。それをここに持っております。」こう言いかけて、喜助は胸に手を当てた。遠島を仰せつけられる者には、鳥目二百銅をつかわすというのは、当時のおきてであった。

喜助は言葉を継いだ。「お恥ずかしいことを申しあげなくてはなりませぬが、私は今日まで二百文というお足

を、こうして懐に入れて持っていたことはございませぬ。どこかで仕事に取りつきたいと思って、仕事を尋ねて歩きまして、それが見つかりしだい、骨を惜しまずに働きました。そしてもらった銭は、いつも右から左へ人手に渡さなくてはなりませなんだ。それも現金で物が買って食べられるときは、私の工面のいいときで、たいていは借りたものを返して、またあとを借りたのでございます。それが、お牢に入ってからは、仕事をせずに食べさせていただきます。私はそればかりでも、お上に対してすまないことをいたしているようでなりませぬ。それにお牢を出るときに、この二百文をいただきましたのでございます。こうして、あいかわらずお上の物を食べていてみますれば、この二百文は私が使わずに持っていることができます。お足を自分のものにして持っているということは、私にとっては、これが初めでございます。島へ行ってみますまでは、どんな仕事ができるかわかりませんが、私はこの二百文を島でする仕事の元手にしようと楽しんでおります。」こう言って、喜助は口をつぐんだ。

庄兵衛は「うん、そうかい。」とは言ったが、聞くことごとに余り意表に出たので、これも、⑤しばらく何も言うことができずに、考えこんで黙っていた。

中略

庄兵衛はただ漠然と、人の一生というようなことを思ってみた。人は身に病があると、この病がなかったらと思う。その日その日の食がないと、食ってゆかれたらと思う。万一のときに備える蓄えがないと、少しでも蓄えがあったらと思う。蓄えがあっても、またその蓄えがもっと多かったらと思う。かくのごとくに先から先へと考えてみれば、人はどこまで行って踏みとまることができるものやらわからない。それを今、目の前で踏みとまって見せてくれるのがこの喜助だと、庄兵衛は気がついた。

庄兵衛は今さらのように驚異の目をみはって喜助を見た。このとき庄兵衛は空を仰いでいる⑥喜助の頭から毫光がさすように思った。

庄兵衛は喜助の顔をまもりつつまた、「喜助さん。」と呼びかけた。今度は「さん」と言ったが、これは十分の意識をもって称呼を改めたわけではない。その声がわが口から出てわが耳に入るやいなや、庄兵衛はこの称呼の不穏当なのに気がついたが、今さら既に出た言葉を取り返すこともできなかった。

「はい。」と答えた喜助も、「さん」と呼ばれたのを不審に思うらしく、恐る恐る庄兵衛の気色をうかがった。

庄兵衛は⑦少し間の悪いのをこらえて言った。「いろいろのことをきくようだが、おまえが今度島へやられるのは、人をあやめたからだということだ。俺についでにそのわけを話して聞かせてくれぬか。」

喜助はひどく恐れ入った様子で、「かしこまりました。」と言って、小声で話しだした。「どうもとんだ心得違いで、恐ろしいことをいたしまして、なんとも申しあげようがございませぬ。あとで思ってみますと、どうしてあんなことができたかと、自分ながら不思議でなりませぬ。全く夢中でいたしましたのでございます。私は小さいときに二親が時疫で亡くなりまして、弟と二人あとに残りました。初めはちょうど軒下に生まれた犬の子にふびんをかけるように町内の人たちがお恵みくださいますので、近所中の走り使いなどをいたして、飢え凍えもせずに、育ちました。しだいに大きくなりまして職を探しますにも、なるたけ二人が離れないようにいたして、一緒にいて、助け合って働きました。去年の秋のことでございます。私は弟と一緒に、西陣の織場に入りまして、空引ということをいたすことになりました。そのうち弟が病気で働けなくなったのでございます。

その頃私どもは北山の掘っ立て小屋同様の所に寝起きをいたして、紙屋川の橋を渡って織場へ通っておりましたが、私が暮れてから、食べ物などを買って帰ると、弟は待ち受けていて、私を一人で稼がせてはすまないすまないと申しておりました。ある日いつものように何心なく帰ってみますと、弟は布団の上に突っ伏していまして、周りは血だらけなのでございます。私はびっくりいたして、手に持っていた竹の皮包みや何かを、そこへおっぽり出して、そばへ行って『どうしたどうした。』と申しました。すると弟は真っ青な顔の、両方の頬から顎へかけて血に染まったのを上げて、私を見ましたが、ものを言うことができませぬ。息をいたすたびに、傷口でひゅうひゅうという音がいたすだけでございます。私にはどうも様子がわかりませんので、『どうしたのだい、血を吐いたのかい。』と言って、そばへ寄ろうといたすと、弟は右の手を床について、少し体を起こしました。左の手はしっかり顎の下のところを押さえていますが、その指の間から黒血の塊がはみ出しています。弟は目で私のそばへ寄るのを止めるようにして口をききました。ようようものが言えるようになったのでございます。『すまない。どうぞ堪忍してくれ。どうせ治りそうにもない病気だから、早く死んで少しでも兄貴に楽がさせたいと思ったのだ。笛を切ったら、すぐ死ねるだろうと思ったが息がそこから漏れるだけで死ねない。深く深くと思って、力いっぱい押し込むと、横へ滑ってしまった。刃はこぼれはしなかったようだ。これをうまく抜いてくれたら俺は死ねるだろうと思っている。ものを言うのがせつなくっていけない。どうぞ手を貸して抜いてくれ。』と言うのでございます。弟が左の手を緩めるとそこからまた息が漏ります。私はなんと言おうにも、声が出ませんので、黙って弟の喉の傷をのぞいてみますと、なんでも右の手に剃刀を持って、横に笛を切ったが、それでは死にきれなかったので、そのまま剃刀を、えぐるように深く突っ込んだものと見えます。柄がやっと二寸ばかり傷口から出ています。私はそれだけのことを見て、どうしようという思案もつかずに、弟の顔を見ました。弟はじっと私を見つめています。私はやっとのことで、『待っていてくれ、お医者を呼んでくるから。』と申しました。弟は恨めしそうな目つきをいたしましたが、また左の手で喉をしっかり押さえて、『医者がなんになる、ああ苦しい、早く抜いてくれ、頼む。』と言うのでございます。私は途方にくれたような心持ちになって、ただ弟の顔ばかり見ております。こんなときは、不思議なもので、目がものを言います。弟の目は『早くしろ、早くしろ。』と言って、さも恨めしそうに私を見ています。私の頭の中では、なんだかこう車の輪のようなものがぐるぐる回っているようでございましたが、弟の目は恐ろしい催促をやめません。それにその目の恨めしそうなのがだんだん険しくなってきて、とうとう敵の顔をでもにらむような、憎々しい目になってしまいます。それを見ていて、私はとうとう、これは弟の言ったとおりにしてやらなくてはならないと思いました。私は『しかたがない、抜いてやるぞ。』と申しました。すると弟の目の色がからりと変わって、晴れやかに、さもうれしそうになりました。私はなんでもひと思いにしなくてはと思って膝をつくようにして体を前へ乗り出しました。弟はついていた右の手を離して、今まで喉を押さえていた手の肘を床について、横になりました。私は剃刀の柄をしっかり握って、ずっと引きました。このとき私の内から締めておいた表口の戸を開けて、近所のばあさんが入ってきました。留守の間、弟に薬を飲ませたりなにかしてくれるように、私の頼んでおいたばあさんなのでございます。もうだいぶうちの中が暗くなっていましたから、私にはばあさんがどれだけのことを見たのだかわかりませんでしたが、⑧ばあさんはあっと言ったきり、表口を開け放しにしておいて駆け出してしまいました。私は剃刀を抜くとき、手早く抜こう、まっすぐに抜こうというだけの用心はいたしましたが、どうも抜いたときの手応えは、今まで切れていなかったところを切ったように思われました。刃が外の方へ向いていましたから、外の方が切れたのでございましょう。私は剃刀を握ったまま、ばあさんの

入ってきてまた駆け出していったのを、ぼんやりして見ておりました。ばあさんが行ってしまってから、気がついて弟を見ますと、弟はもう息が切れておりました。傷口からはたいそうな血が出ておりました。それから年寄衆がおいでになって、役場へ連れてゆかれますまで、私は剃刀をそばに置いて、目を半分開いたまま死んでいる弟の顔を見つめていたのでございます。」

少しうつむきかげんになって庄兵衛の顔を下から見上げて話していた喜助は、こう言ってしまって、視線を膝の上に落とした。

喜助の話はよく条理が立っている。ほとんど条理が立ちすぎているといってもいいくらいである。これは半年ほどの間、当時のことをいくたびも思い浮かべてみたのと、役場で問われ、町奉行所で調べられるそのたびごとに、注意に注意を加えてさらってみさせられたのとのためである。

庄兵衛はその場の様子をまのあたり見るような思いをして聞いていたが、これが果たして弟殺しというものだろうか、人殺しというものだろうかという疑いが、話を半分聞いたときから起こってきて、聞いてしまっても、その疑いを解くことができなかった。弟は剃刀を抜いてくれたら死なれるだろうから、抜いてくれと言った。それを抜いてやって死なせたのだ、殺したのだとは言われる。しかしそのままにしておいても、どうせ死ななくてはならぬ弟であったらしい。それが早く死にたいと言ったのは、苦しさに耐えなかったからである。喜助はその苦を見ているに忍びなかった。苦から救ってやろうと思って命を絶った。それが罪であろうか。殺したのは罪に相違ない。しかしそれが苦から救うためであったと思うと、⑨そこに疑いが生じて、どうしても解けぬのである。

庄兵衛の心の内には、いろいろに考えてみた末に、自分より上の者の判断に任すほかないという念、オオトリテエに従うほかないという念が生じた。庄兵衛はお奉行様の判断を、そのまま自分の判断にしようと思ったのである。そうは思っても、庄兵衛はまだどこやらにふに落ちぬものが残っているので、なんだかお奉行様にきいてみたくてならなかった。

しだいに更けてゆく朧夜に、沈黙の人二人を乗せた高瀬舟は、黒い水の面を滑っていった。

（森鴎外『高瀬舟』より）

・同心　警察の仕事をした下級役人　・宰領　監督し取り締まること
・遊山船　遊びに行く客を乗せた船　・毫光　仏の眉間から出る光　・オオトリテエ　権威や権力者

(1) 傍線①「絶えず喜助の挙動に細かい注意をしていた」について次の問いに答えなさい。

1 庄兵衛はなぜ喜助の様子を気にしているのですか。次の文の【　】に当てはまる言葉を文章中から十三字で抜き出しなさい。（2点）

●これまで護送した罪人のほとんどは、【　　】だったのに、喜助は違ったから。

2 庄兵衛は喜助の様子をどのように表現していますか。漢字三字で抜き出しなさい。（1点）

(2) 傍線②「いかにも楽しそう」とありますが、この喜助の表情をたとえを用いて表現している部分を、文章中から十三字で抜き出しなさい。（2点）

(3) 傍線③「つじつまの合わぬ」と同じ意味の故事成語を漢字二字で答えなさい。（1点）

(4) 傍線④「京都はけっこうな土地」とありますが、この場合の「けっこう」の意味は次のア～エのうちどれにあたりますか。記号で答えなさい。（1点）

ア たいへんよいさま　イ それ以上必要としないさま
ウ 気立てがよいさま　エ かなり程度が激しいさま

(5) 傍線⑤「しばらく何も言うことができずに」とありますが、なぜ言えなかったのでしょうか。次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。（1点）

ア 自分の知らないことばかりで、びっくりしたから。
イ 喜助の暮らしぶりに同情し、かわいそうで口がきけなくなったから。
ウ 自分が考えなかったことばかりを聞き、どう判断してよいかわからなくなったから。
エ あまりに厚かましい喜助の考えに腹を立てて、言葉も出なかったから。

(6) 傍線⑥「喜助の頭から毫光がさすように思った」とありますが、これは庄兵衛から喜助へのどのような感情を表していますか。次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。（1点）

ア 恐怖　イ 信頼　ウ 畏敬　エ 共感

(7) 傍線⑦「少し間の悪い」のはなぜですか。次のア～エから最も適するものを一つ選び、記号で答えなさい。（1点）

ア 最初は呼び捨てにしていたのに、誤って「さん」という敬称をつけて呼んだことが恥ずかしかったから。
イ 長い会話が終わった後だったので、質問をするにはタイミングが悪かったから。
ウ 罪人の喜助に対して、役人である自分が「さん」という敬称をつけて呼んでしまったから。
エ 喜助にとっては話したくないであろうことを、無遠慮に聞いてしまったから。

(8) 傍線⑧「ばあさんはあっと言ったきり、……駆け出してしまいました」とありますが、「ばあさん」は喜助と弟の様子を見てどう思ったのですか。「と思った。」に続くように八字程度で答えなさい。（1点）

(9) 傍線⑨「そこに疑いが生じて、どうしても解けぬのである」とありますが、それはなぜですか。次のア～エから最も適するものを一つ選び、記号で答えなさい。（1点）

ア 喜助でなくてもその場にいたら頭が混乱してしまい、正常な判断ができないのも当然だと思うから。
イ 喜助の話はとても分かりやすいが、喜助が本当のことを言っているという保証が何もないから。
ウ 喜助が手を貸したから弟が死んだのだという証拠がないため、喜助の行為が殺人とは言い切れないから。
エ 喜助の行為は、個人の欲望や憎しみから起こす利己的な殺人と同じように考えることはできないから。

(10) この物語の季節はいつですか。次のア～エから最も適するものを一つ選び、記号で答えなさい。（1点）

ア 春　イ 夏　ウ 秋　エ 冬

(11) 弟の死を悲しんでいることが読み取れる喜助の行動を、文章中から十二字で抜き出しなさい。句読点も一字に含みます。（3点）

(12) 喜助の回想について次の問いに答えなさい。

1 この回想は喜助が自分の口で語る形式になっていますが、どこまでが回想にあたりますか。終わりの六字を抜き出しなさい。句読点やかぎかっこも一字に含みます。（2点）

2 喜助の回想は、この作品の中でどのような役割を果たしていますか。次のア～エから適するものを二つ選び、記号で答えなさい。（各1点）

ア 喜助の生い立ちや貧しい境遇がわかり、読み手の同情を誘う効果がある。

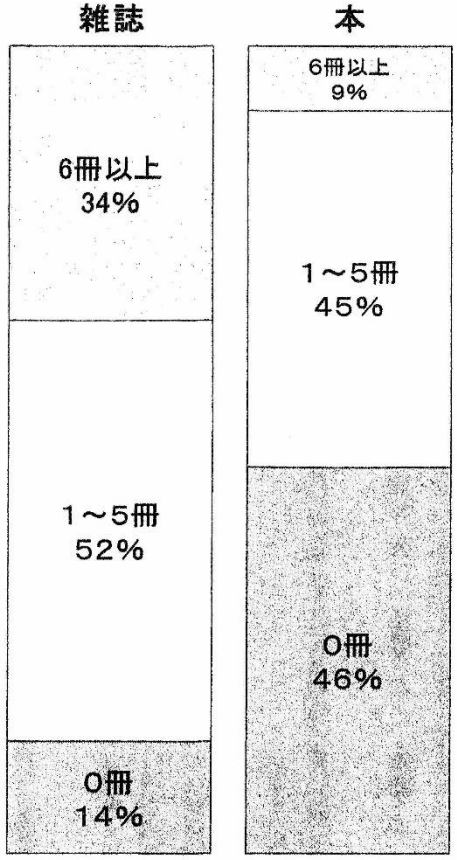
イ 回想後に舟がまだ目的地に到着していないことから、喜助がとても遠いところに送られていると読み手に伝える効果がある。

ウ 喜助のとった行動が、はたして罪になるのかどうか、読み手にも疑問を抱かせる効果がある。

エ 過去に起こった出来事を丁寧に描写することで、この作品の複雑な時間軸を整理する効果がある。

五、 次の資料を読み、あとの条件に従って作文を書きなさい。[思・判・表　書く・8点]

中学生が一ヵ月に読む本と雑誌の冊数（本に漫画は含めない）



〈条件〉

・二段落構成で、一四〇字以上一八〇字以内で書く。

・第一段落には、資料から読み取れること、気付いたことを書く。

・第二段落には、読み取ったことに対する自分の考えや感想を書く。

〈減点項目〉

●4点減点

・右記の条件が守られていない。

●1点減点

・原稿用紙の使い方が間違っている。（マスの使い方、改行の仕方など）

・文のねじれや文末表現の重複など、読みにくい箇所がある。

・ひらがなが極端に多い。

・脱字

・話し言葉が使われている。

※数字は漢数字を使うこと。（46→四六）　「%」は、記号でもよいし「パーセント」でもよい。

【試し用】

140

180

140

180